〔古武道研究班〕

中山正敏の生涯と空手道思想

青　木　清　隆　　中　谷　康　司
宮　本　知　次

The Masatoshi Nakayama's Whole Life and His Thought of Karate-Do

Abstract

The purpose of present study is to reveal Masatoshi Nakayama's whole life and his thought of Karate-Do. Nakayama performed karate in Takushoku University and became Gichin Funakoshi's pupil. Thereafter, he founded the Japan Karate Association. On the other hand, Nakayama took elements of competition into karate. He considered that the "Kime" was the most important in karate. The "Kime" means that the performance of the player was effective. However, the spread of the games of karate caused loss of the "Kime". Nakayama had suffered from this inconsistency. Our present study suggests that a future leader of Karate-Do should refer to Nakayama's thought of Karate-Do and consider hypostasis of Karate-Do through his suffering.

1. はじめに

筆者らはこれまでの研究において，沖縄における「唐手」（当時）の公開に貢献し，またそれを本土に伝え，地域の格闘技術から日本の武道「空手道」へと醸成しながらその地位を確立していった船越（富名腰）義珍の足跡を追うことによって，空手道の近代化の過程を明らかにしてきた[1)2)3)]．また，それらを成し遂げる中で船越がどのような空手道思想を持っていたのか，その全般に亘り考察を加えることで空手道の近代化の現状を理解する指針を模索した[4)]．柔道の近代化との比較によって空手道近代化の特徴を明らかにしようとした試みにおいて，筆者らは井上俊による柔術の「近代化」の要点に注目した[5)]．井上は，「柔術」近代化の主要な

要点として以下の９点を挙げている[6)].

① 従来の柔術各派のさまざまな技を比較検討し，分類し，理論的に体系化したこと.

② 入門者，修行者のモチベーションを高めるために段位制を導入したこと.

③ 試合のルールと審判規程を確立したこと.

④ 講道館を財団法人化し，近代的な組織として発展させたこと.

⑤ 柔道修行の教育的価値を強調したこと.

⑥ 講演や著作，雑誌の発行などを通して，講道館柔道を広めるための言論活動に力を入れたこと.

⑦ 早くから柔道の「国際化」を構想し，海外への紹介・普及に努力したこと.

⑧ 女性の入門を認め，講道館に女子部を設け，女性層への柔道の普及を図ったこと.

⑨ 紅白試合，学校や地域の対抗試合などを促進することによって，柔道を「見るスポーツ」としても発展させたこと.

筆者らはこれらの要点と比較し，空手道は組織化の点について問題を残すこと，またその組織化障壁の原因として試合採用の可否があったことを指摘した．一方，船越の空手道思想においては,「眞の空手」すなわち「空手道」は「護身」という面からその精神性が突き詰めて理論化されており，攻撃力を競う「試合」とは相いれない価値観が堅持されていることが明らかとなった[7)]．空手道の近代化を考えていく上では，試合の採用すなわち競技化をどのように扱っていくかという問題が１つの大きな要素として重要であると考えられる．船越の門下生において，この競技化を主導したのは中山正敏（1913（大正２）年－1987（昭和62）年：表参照）である．中山は日本で初めて法人格を有する空手団体となる日本空手協会を創設し，指導部長・首席師範を歴任することで技術面を牽引するとともに，試合制度を整備して大会を開催した．また，国際化の場面においてもルールの作成や審判業務を長く務めるなど，競技化の推進をおこなった人物である．この中山の空手に関する足跡やその競技化の過程，またどのような点を重要と考えて空手を指導していたのかといった空手道思想について考察することは，その不採用を不易とした船越の価値観の検証になるとともに，試合が広くおこなわれるようになった現在の空手を理解する上でも非常に重要と考えられる．しかし，これまでに中山について取り扱った研究は存在しない．そこで，本研究は中山正敏に注目し，空手とのつながりを重視しながらその生涯を追い，競技化を進めた中山がどのような空手道思想を持っていたのかを検討することを目的とした.

2. 空手を中心とした中山正敏の生涯

2.1　中山正敏の略歴

中山は，1913（大正２）年４月６日，中山家の長男として山口県に生まれた．中山家は，真田家の家臣で代々信州松代藩の剣術指南を務めた家柄であり[8]，曽祖父の中山兵右衛門も神道無念流の戸賀崎熊太郎暉芳（とがさきてるよし）の高弟で剣術家であった[9]．しかし，祖父・直道の代に明治維新を迎えたため，直道は上京して医師になっている．父親の直敏も大日本帝国陸軍（以下，陸軍）衛生部一等薬剤正（上長官職，大佐に相当）として，医療系の職業に従事した[10]．父親は軍務にともない転勤が多く，中山が小学校１年生の頃は千葉県四街道に住み，習志野練兵場でのエピソードも見られるが，父親が台湾の軍司令部付になったため，その後の小学校時代は台湾に渡り，台北の南門小学校で過ごしている[11]．そして，中等学校（旧制）時代は父親が金沢連隊区司令部付であったことから金沢第一中等学校に通った．弟の中山義敏は陸軍航空兵士官学校第51期生として陸軍飛行第六戦隊に配属，満州・ソビエト連邦の国境付近を偵察飛行中に悪天候で国境を越え，還らぬ人となっている[12]．以上のような家族関係と少年時代を過ごした中山であるが，中山の父親は医師になることを希望していたのに対して，中山は満蒙開拓講演会（1931（昭和６）年の満州事変以降，日本政府の国策として本格化していた中国大陸の満州，内蒙古，華北などへの入植に関する講話）を聴きに行ったことを契機として満州に憧れるようになり，海外雄飛のロマンと夢を抱いて拓殖大学[(注1),13]への進学を志したとされる[14]．

1932（昭和７）年，旧制中学を卒業した中山は拓殖大学への入学を果たし，後述のように生涯の仕事となる空手と出会う（後述，2.2）．1937（昭和12）年に拓殖大学を卒業すると，当初の夢を果たして中国へ渡り，留学生・中国の政府機関での仕事に携わりながら９年間を中国で過ごした．この間も空手は続け，1946（昭和21）年に帰国すると敗戦後の空手道復興に寄与する（後述，2.3）．その後，母校，拓殖大学での空手部指導をきっかけに1954（昭和29）年には拓殖大学に体育講師としての職を得る．そして，1984（昭和59）年の退職までの約30年間，空手道の競技化や組織化に尽力しながら大学教員として勤め上げた（後述，2.4）．退職から３年後，1987（昭和62）年４月15日，心不全のため東京女子医科大学病院（東京都新宿区）において74年の生涯を閉じている[15]．

2.2 拓殖大学時代

2.2.1 拓殖大学への入学と空手との出会い

中山正敏は1932（昭和７）年，拓殖大学の予科[(注2),16]に入学した．中山の拓殖大学在籍は1932（昭和７）年４月～1937（昭和12）年３月までの予科２年，学部３年の５年間である．中山は２年間の予科修了後，唯一の学部である商学部の拓殖科（他に商科）で支那語（現在の中国語）を専攻した．

この拓殖大学への入学を機に中山は偶然，空手と出会う．中山の回想によれば，「海外雄飛のロマンと夢を抱いて拓殖大学の門をくぐったのは昭和７年春．将来に備えて心身の基礎を作る為，武道をと志し，どーせなら中学時代にやっていた剣道をやることにして道場へ赴いた．ところが既定の時間を間違えたのか，勇ましい剣道衣姿も竹刀の音もなく，二十名余りの若者が柔道衣まがいの白いキャラコを着し中には柔道衣剣道衣姿も居りテンデに黒帯や白帯をしめ，集団で丸い赭顔の小さいオジイさんの号令で奇妙な踊りをやっていた．いささかとまどって見ていたが皆は真剣で手を振り上げ足をブン廻して時々見ている私の腹ワタにしみ込むような気合をかけ飽くことなく前に進み後に戻り右に左に絶え間なく動いて汗を流してい」るのを目にする[17]．

中山自身は，金沢第一中等学校（旧制中等学校，のち金沢第一高等学校，現・金沢泉丘高等学校）の在学中に「カラテ」の講演と演武に触れる機会があり，「カラテ」自体を目にしたのは必ずしもこの時が初めてではなかったようである．しかし，この時，指導していた「丸い赭顔の小さいオジイさん」が船越義珍師範であり，これが船越義珍との出会いとなる．また当時学部３年に在籍していた釘宮幸雄の勧誘により，この時から拓殖大学唐手術同好会（当時）の稽古に加わることになった．

2.2.2 拓殖大学空手部

中山が加入した拓殖大学空手部（当時，唐手術研究会）は1930（昭和５）年に創設された．専門部（注２参照）に所属していた高木正朝が船越義珍の門下生であり，沖縄県人寮明正塾での稽古に参加していたことが契機となる．創設の機縁を伝える拓殖大学の資料[18)19]はこの高木が『拓殖大学麗沢会空手部50年史』に寄せた「拓大唐手術こと始めの記」をもとに記述されている[20]．それによれば，高木は1927（昭和２）年の夏に長兄の友人田中国城から唐手術の指南を受け，唐手術に心を奪われる．この田中は東京帝国大学時代に船越門下として明正塾で唐手術を修練していた経歴を持つ人物であった．1929（昭和４）年，熊本県立熊本中等学校を卒業した高木は，上京して拓殖大学専門部に入学し，早速，明正塾の船越義珍を訪ねる．そし

て，田中の紹介として入門を許され，本格的な稽古を開始する．その後，1930（昭和５）年に拓殖大学では先輩にあたる日置乙次郎が船越に入門し，高木がその指導に当たることになった．この日置が，拓殖大学内で唐手術の講話会を主催し，その壇上に高木を講師として立たせ，稽古の希望者を募ったことが拓殖大学空手術研究会の始まりとなる．この時の稽古希望者には先述の中山を勧誘した釘宮や体操の講義を担当していた江頭正治講師（退役陸軍大尉，後に空手部初代部長）がいた．

2.2.3　予科時代の生活

このようにまだ出来たばかりの唐手術研究会に，1932（昭和７）年に入学した中山が先述の経緯で加わることになる．中山の記述によれば[(注3),21]，加入当時の研究会は，まだ空手を専門にやる者が少なく，剣道部や柔道部，相撲部などから時折練習に参加する豪傑を交えて，30人程度の学生で稽古するような状況であった．中山の同期には遠藤，杉本，富田，そして専門部の松本（後に学部編入し，中山と同期になる，空手では１年先輩）の４名が在籍していた．

当時の稽古は形の反復練習と基本組手（形などから１つの技を取り出し，約束された技の仕掛けに対する受けを練習する組手）が主体であり，各技（突き，打ち，蹴り，受けなど）の動きを練習する基本やそれらを実際に巻藁に当てる稽古は自主的に練習する形態がとられていた．指導者による指導体制としては船越師範が下田武師範代を伴い週に１回，下田師範代が別に１回と週２回の指導が設定されており，まさに船越義珍直々の指導を受けていたことがわかる．この頃，下田師範代によって五本組手が考案され，それまで形と基本組手のみだった稽古に，連続の攻防動作が加わり，その勇ましさに中山をはじめ学生たちは魅了された．師範来校時は形に終始し，その他の稽古では五本組手に時間を割くようになっていく．

また，唐手術研究会創設時より稽古に参加していた江頭講師は，週１回の体操の時間に西欧式の体操ではなく，空手の形を取り入れ，全学生に実施させていた．中山もこの授業を受けていたが，予科２年からは遠藤と共に臨時の助手としてクラスメートの指導に参加するなど，早くから指導の経験も積んでいった．

1929（昭和４）年，船越は地方武術としての「唐手術」から日本武道の系列への脱皮を意味する「空手道」への名称変更を宣言している[22]．当初，拓殖大学は唐手術研究会として発足したが，中山の予科時代に船越の提案に従い空手道部と名称を変更した．

2.2.4　学部時代の生活

1934（昭和９）年，中山が学部１年になる頃には，熱心な部員は午前10時ごろから道場に押

しかけ，午後３時までの授業のない時間をすべて空手の練習に当てるような生活になっていた．中山も道場中心の生活を続け，秋には松本，遠藤らとともに初段を允許される．稽古内容は，五本組手の動き，捌きのスピードが次第に増し，連続の追い込み組手へと進んだ．さらには最後の段階で攻防が自由で活発な動きへと変化していった．しかし，10月に下田師範代が急逝し，稽古指導の重要な柱を失うこととなる．この他，船越師範の提案により動作および習得の困難度に合わせ，平安（ピンアン）の形の初段と二段の内容を入れ替え，教育体系の整備がなされたのもこの時期である．

1935（昭和10）年，学部２年になった中山らは学部３年の鈴木繁と協力して，入部者を激増させた．組織的にも確立し，基本・形・組手を三位一体とする稽古も体系づけられ，寒稽古などの行事，約３時間の日曜稽古も始まった．春からは急逝した下田師範代に代わって，船越義珍の３男，船越義豪を師範代に迎えて新たな稽古の柱が出来る．義豪師範代が空手の指導に本格的に乗り出したのを契機に船越邸が改修され，道場が併設されると，中山を含む拓殖大学の幹部も週２，３回は船越邸へ夜稽古に通うようになった．この夜間稽古によって義珍師範，義豪師範代からの直接の厳しい指導を頻繁に受けることになる．中山も卒業までの２年間，これに加わり，中山の空手の基礎はここで築かれた．11月には同期の松本，遠藤らとともに二段を允許される．この頃の稽古内容は，基本（一本）組手の約束事が少なくなり，速い動きと強烈な突っ込みに対して，受け－極め（反撃）が１呼吸でおこなわれるようになり，真剣な一本勝負に通ずる自由一本が盛んになっていった．また，追い込み五本組手の最後の段階での自由な攻防が一段と激しさや変化を増し，やがて自由組手への基盤が出来上がっていった．そして，その最終段階での攻防を切り離し，自由一本の真剣で気迫のこもった強い極め技を縦横に駆使し合う自由組手が幅を利かせるようになっていった．これまで形の使い方・技の用法を学ぶために，約束で決められた技と受けを繰り返す組手の中で技に対する理解を深めていたものが，自由に攻防を争う競技的な要素が強くなってきた．師範である船越はそのような変化をよしとしなかったため，師範の来校時には形の稽古に終始し，それらの変化を容認していた義豪師範代の来校時には自由一本と自由組手を盛んに稽古するかたちとなった．一方，師範邸に集まることが多くなった各校幹部の交流が盛んになり，５月には慶大，一高，早大，商大，日医大，拓大等の幹部が集まって学生連盟の結成が提議され，また本部道場設立の打ち合わせがおこなわれた．その際，交換稽古についても提案され，６月23日に実際におこなわれた．各校が10名前後を選出し，形を各校別で演武し，続いて各校別の組手がおこなわれた．そこまでは和気藹々とした雰囲気でおこなわれていたが，各校の代表選手による交換組手になると五本組手のはずが乱戦となり相当のけが人が出ている．対校心とともに，先述の自由組手指向の高まりで

ある．こうした競技的要素に対する指向は学生たちの要望するところであり，多数のけが人を出したにもかかわらず，継続開催が予定された．

1936（昭和11）年１月12日，師範邸に各校幹事（拓大は松本，中山）が集まり，学生連盟発会式が11月におこなわれることが決まった．従って，中山らは最終学年である学部３年としてその立ち上げに携わることになる．そして，11月７日，船越義珍を師範に頂く慶大，一高，商大，拓大，早大，法大による学生連盟「大日本学生空手道連盟」の発会式が渋谷の青山公会堂でおこなわれた．ここでは各校が演武を競い，各校別の自由組手もおこなわれた．このプログラムの中で自由組手という文字が初めて活字になる．中山はこの他に６月におこなわれた陸軍戸山学校での演武に，船越義珍師範・義豪師範代に随行し，義豪師範代の組手の相手役を務めるなど，門下でも大役を担う存在へとなっていった．それは，11月末に松本，遠藤らとともに三段を允許されたことからもわかる．この頃は，まだ三段は珍しく，彼らの免状は第九，十，十一号であった．　そして，1937（昭和12）年１月，卒業前の最後の仕事として，拓殖大学の各方面に根回ししていた麗沢会体育部（拓殖大学のいわゆる体育会）加入について来年度から加入認可で部昇格の話を取り付け（ただし，実際には昭和12年度ではなく昭和13年度から正式加入[23]），臨時の予算も獲得した．

2.2.5　空手部以外の活動

上述のように空手三昧の生活を送っていた中山であるが，大学当初に抱いていた大陸雄飛の夢は熱く，「大学の授業はともかく「亜細亜研究会」の活動や，将来，大陸，つまり中国で活躍すべく，中国語の勉強には精を出し」ていた[24]．また，1935（昭和10）年の夏，つまり学部２年の夏には，単独でモンゴルを旅している．その旅は興安嶺西麓のハロンアルシャンからハイラルまでの約250kmにおよぶホロンバイル大平原を徒歩で歩き通すというものであった[25]．1936（昭和11）年には，満州国ハルピン市にいた空手部の創設者である高木を訪ね，空手部のバッチを渡したとのエピソードも残っている（高木は３年制の専門部のため，中山とは在学期間が入れ違いであり，この一件が高木との強いつながりになった）[26]．

このように在学中から大陸に親しみ，卒業後も直ぐに大陸へ渡り，夢を実現する．

2.3　卒業後の中山正敏

2.3.1　中国での中山正敏

1937（昭和12）年３月に拓殖大学を卒業すると，中山は満州国でおこなわれた留学試験に合格し，４月から北京の北京同学会話学校に学び，また中国大学の聴講生となった[27][28]．北京西

郊の盧溝橋で１発の銃声を巡り日中両軍が軍事衝突する事件，盧溝橋事件が起きると中国語が出来るということで陸軍の通訳として３ヶ月ほど駆り出されるといった経験もしている[29]．留学を終えた中山は1942（昭和17）年４月から華北政務委員会[(注4),30]専員として日本が後援する中国の政府機関での仕事を始めるが，その詳細は不明である[31]．敗戦後も半年間は中華民国政府（現在の台湾）の中央食糧管理局で働いた後，帰国している[32]．

中国滞在中の帰国歴などは定かではないが，1943（昭和18）年４月に帰国し，空手部との接触があった記録が残っている[33]．同年に結婚（妻：秋子）との記録もあるため[34]，これに関連する帰国と推察される．いずれにせよ日本との接触あるいは空手部との接触が存在していたと考えられる．また，中山は留学中に滞留していた日本人留学生寮である大東学舎に空手部を作って稽古を続けるとともに，時折，北京市内に10数程度存在した中国拳法の道場を「半分勉強，半分道場破り」のつもりで稽古に訪れるなど，稽古とは切れない生活をしていた[35][36]．中山が寄宿していた大東学舎で日本向けの中国拳法紹介映像の撮影がおこなわれた際は，求めに応じて，招かれた中国武術の大家たちの前で空手の形を披露するといったこともおこなっている[37][38]．

2.3.2　帰国後の中山正敏

中山は1946（昭和21）年５月に帰国しているが，帰国後の動向は必ずしも明らかではない．中山の記述によれば，「帰国して何かと慣れない武士の商法をするかたわら，母校を中心に空手道への愛着から，次第に指導者としての道を歩き出した」とある[39]．このような空手に関する活動の記述が見られるようになるのは1948（昭和23）年からである．1980（昭和55）年の中山に対する取材記事には「学生連盟の発会式が昭和二十三年に行われ，それを「なつかしい」くらいの気持ちで見に行き，かつての空手仲間と再会するのである．それがきっかけとなり昭和二十五年に，日本空手協会が発足，中山氏は技術顧問ということになった」とある[40]．一方，拓殖大学空手部の記録にも1948（昭和23）年11月，早稲田大学においておこなわれた空手協会の発会式に中山が参加し，その後，日曜日の稽古を指導するようになったと記録されている[41]．従って1948（昭和23）年には具体的に中山が空手道の戦後復興に寄与していたことがわかる．しかし，２つの記述では，日本空手協会の発足時期に若干の相違がある．当時に最も近い記述として，1955（昭和30）年に中山が記述した「空手について」という解説には「流派を超越した真正空手道の確立を目的として昭和二十三年五月，日本空手協会が設立され，旧に倍する発展を示し，現在においては，日本全土に支部が生まれ，会員の数も日毎に増加しています.」との記載が見られる[42]．また高木が記した「日本空手協会のたどった道」にも1948（昭

和23）年には日本空手協会初めての支部，岡山県支部が誕生し，1950（昭和25）年に船越，中山らも参加した支部結成三周年記念演武大会が挙行されたとの記述や1949（昭和24）年に愛媛県支部が誕生したとの記述があることから[43]，1948（昭和23）年には準備段階にせよ，何らかのかたちで日本空手協会が発足していたと考えられる．また，その発足に際して，当初から中山が中心的な役割を果たしていたことが推察出来る．

1936（昭和11）年，中山は学部時代に，拓殖大学の代表として船越義珍を師範に頂く大学の学生組織として「大日本学生空手道連盟」の発会に関わった（2.2.4）．卒業後，中山は中国に渡ったために，その後の展開に対する関与は見られないが，この組織化の動きは拡大しており，1941（昭和16）年に明治大学で開催された演武会において，集まった各流派の大学によって統一機関を設ける旨の同意がなされた[44]．この動きは第２次世界大戦によって頓挫するが，1948（昭和23）年の学生連盟発足，それに続く日本空手協会の発足の動きは，1947（昭和22）年の船越師範の疎開先からの帰京，1948（昭和23）年の GHQ による日本武道禁止の解禁を受け，戦前のこの動きが力を取り戻して復活したと捉えることが出来る[45]．中山は組織化草創期のメンバーとして中心的な立場を担うのに適任であった．

このように帰国後，中山は学生の指導や組織化に関わってきた．その他に，連合国駐留軍への紹介演武や指導においても大きな役割を果たした．1948（昭和23）年頃から，連合国駐留軍，特に米空軍基地将兵の要望に応え，日本の武道界の一流メンバー，剣道：中山博道範士，柔道：三船久蔵師範，合気道：富木謙治八段らによる紹介演武・講習会が各地において催されるようになる．空手は各大学の OB・現役部員が参加し，中山も拓殖大学のメンバーを従え，１週間に２回程度各地の基地を回った[46]．このような活動は４年程度続き[47]，各地を転々と巡業する姿がサーカスに例えられ「中山サーカス」と呼ばれるようになった[48]．そして，それらの活動を通して次第に空手道に対する関心は高まり，空手道に注目した米国空軍体育指導官ブルーノー（Emilio Bruno）中尉の努力によって，1952（昭和27）年になると米本国の戦略空軍体育関係者が十数名ずつ訪れ，中山らの指導を受けるようになる[49]．彼らは一定期間（３ヶ月程度）の稽古を積み，その後，本国や世界各地に点在する米国空軍基地に戻って体育として空手を指導するようになった．この体育関係者の派遣は４回におよび，これが米空軍をはじめとする空手道の国際普及の契機になった．

2.4　拓殖大学の教員時代および退職後

中山は学生や米軍への指導，日本空手協会の発足によって，空手界での役割を増していった．そんな中，拓殖大学空手部は1951（昭和26）年に中山を大学の体育講師（教員）として招

聘すべく，拓殖大学総長宛に採用願を提出する[50]．そして，中山は1954（昭和29）年４月から実際に体育講師として拓殖大学に迎えられた[51]．中山は３代目の空手部部長に就任し，空手部の記録においても表記が「中山先輩」から「中山部長」に変化する[52]．

拓殖大学内では，1956（昭和31）年４月から1965（昭和40）３月まで拓殖大学体育局次長を，1969（昭和44）年４月から1975（昭和50）年６月まで同体育局長を務め，空手のみならず拓殖大学の体育分野の発展に寄与している[53]．また，この間，1960（昭和35）年９月から1963（昭和38）年10月までは拓殖大学調査課（現在の入試課）長を兼任するとともに，1972（昭和47）年には教授（政経学部）に昇格した．このように1984（昭和59）年３月の定年退職を迎えるまでの約30年間，体育を担当する大学教員としてのキャリアも重ねている．この他，1960（昭和35）年４月から1964（昭和39）年まで防衛大学校でも体育講師（非常勤）を務めた．

1954（昭和29）年，中山が拓殖大学に入職し，空手部部長となった年の夏合宿（宮城県松島町）後，空手道の試合化に向けた大きな転機が訪れる[54]．合宿に先立ち，合宿後に行われるレジャーセンターのお披露目の席で，拓殖大学空手部に空手の演武会が依頼された．この演武会で企画したのが空手の試合である．中山らは以前から考えてきた試合方法や判定方法について合宿の間に更に検討を加え，試合規定を完成させた．「戦後若い空手家が柔剣道と同じように競技が出来ないかと切望しきりであったのと，戦前から引き継がれていた各大学間の交換稽古が最後にはバタバタあちこちでひっくり返るような結果になるので平和日本で空手が暴力だなどと云われるのは折角の空手の歴史に傷がつく．何とか早くルールを作り思い切って試合を行った方が良いと」の多くの希望を実現したと中山は述べ，「試合化に踏み切ったのは結局成功であったと確信する」と評価している．このような試みは必ずしも拓殖大学だけのものではなく，1952（昭和27）年11月19日に早稲田大学の大島劼（現・アメリカ松濤館館長）の考案により慶応と早稲田の間で初めて試合形式での交換稽古がおこなわれたとの記録も残っている[55]．中山はこの試合の審判を依頼されており，この件とも無関係ではない．試合化への動きは拓殖大学だけのものではなく，この頃の若者の中に試合化を望む声が多数あったものと考えられる．本件は，一般に公開した点において，非常に重要な第一歩であった．

この頃，中山は日本空手協会で指導部長を務めている．1955（昭和30）年の「空手について」という解説の肩書や[56]，国公立図書館に所蔵される日本空手協会の最も古い発行物である1957（昭和32）年１月の「日本空手協会月報　一月号」（沖縄県立図書館所蔵）の肩書も指導部長として名を連ねている[57]．中山が技術を牽引する一方で，組織としての日本空手協会は高木がその確立を牽引することになる．1951（昭和26）年に高木は中山と再会する．そして，空手道の（戦後）再建に向けて努力する中山の姿に心を打たれ，1952（昭和27）年に高木は空手

界へ復帰する．その復帰によって日本空手協会の組織化は大きく前進する[58]．その大きな一歩は，1955（昭和30）年にムービーセンター藤井譲社長の協力により，四谷一丁目十三番地のムービーセンター内に日本空手協会の道場が出来たことである（３月20日）[59]．この道場がその後の活動の基盤となる．この当時の日本空手協会の役員には，最高師範：船越義珍，会長：西郷吉之助（西郷隆盛の孫，参議院議員）以下，副会長：小幡功（慶大），理事長：高木正朝（拓大），理事：中山正敏（拓大），福井功（拓大）西山英峻（拓大），中村貞夫（慶大），高木房次郎（慶大），湯沢正文（慶大），伊藤公男（法大），坂井武彦（昭和医大），野口宏（早大），加瀬泰冶（専大），久保田正一（商大・現一橋大），高木丈太郎（中大），杉浦初久二（亜大），柳川多喜蔵（松坂屋）らが名を連ね，当初の目的として挙げられた「流派を超越した」集まりとまではいかないが松濤門下の主だった団体が結集したかたちとなった[60]．

しかし，この道場建設の後，同年５月27日に早大が脱会，早大を代表した野口理事が辞任し，５月30日に中大が脱退，1956（昭和31）年には小幡（慶大），中村（慶大），高木房（慶大），湯沢（慶大），高木丈（中大）らが，1957（昭和32）年には久保田（商大・現一橋大）もそれぞれ協会から離脱することとなり，門下が一堂に会することは叶わなくなった[61]．高木は各大学の理事が離散した理由を，四谷道場は単なる町道場に過ぎず，町道場に名を連ねるわけにはいかないと考えたためであると考察している．空手を広く伝えるためには専従の指導者を置き，独立採算つまり空手の指導で利潤を得て空手の指導者が生活出来るようにする必要があると日本空手協会は考えたわけである．しかし，これまで大学で先輩が後輩に無償で伝えていくという形式で伝承されてきた空手界にとっては違和感を覚えるものだった可能性が考えられる．一方で，下田武師範代とともに草創期に四段に列せられた清水敏之の道場：空道館は「昭和三十一年七月二十七日協会理事会において最高技術師範船越義珍先生をご高令（ママ）の理由で書類手続上削除する旨議決されるに至り，万象（著者注：清水敏之）先生は空手道中興の祖，そして空手道内地伝達の功労者である空手道最高峰の船越義珍先生をいかにご高令（ママ）のため御手数をお掛けすることはお気の毒であるとの理由からとは云え，そのご存命中に削除することは武術を学ぶ者として道義上許すべからざることと判断され，恩師が協会より削除された以上同会に籍を置くことは許されない」との理由をもって，日本空手協会に脱会届を提出している[62]．この記載には船越家も清水の挙げた問題点に同調していることを示す親族（船越義英）の書簡抜粋も掲載されている．従って，必ずしも前述の高木があげた理由だけではなく，高齢になった船越師範に対する接遇が関係した可能性も考えられる．このことは，1957（昭和32）年４月26日にこの世を去った船越師範の葬儀を日本空手協会が主催・運営することを親族が拒否するところまで尾を引くことになった[63]．また，先述の空手道の試合化は船

越師範の思想と反することから，試合化の推進についても要因の１つとなったことが推察される．いずれの理由にせよ，組織の運営上のどこかに看過出来ない齟齬が生じていたことは確かである．

結果的に松濤門下を統一することは出来なかった．しかし，日本空手協会は四谷の道場を起点に専従の指導員を置き，また指導員を養成する研修生制度を設けて多くの指導員を養成し，国内・外へと指導員を派遣することで空手道の普及・発展に努めていった[64]．また，1958（昭和33）年４月10日，日本空手協会は文部大臣より社団法人の認可を受け（許可委社180号），組織としても確かなものとなった[65]．船越の死後，1958（昭和33）年からは中山が日本空手協会の首席師範となり，1987（昭和62）年４月15日に亡くなるまでその任を全うし，常にその技術・指導を牽引することで稽古の柱となり，会の発展に寄与した．

船越義珍が逝去した1957（昭和32）年の10月20日，日本空手協会の第１回全日本空手道選手権大会（於：東京体育館，日本空手協会主催）が開催された[66]．この大会では，中山らによって考案された組手試合および形試合がトーナメント方式で実施され，文部大臣をはじめとする多くの人たちに公開された．これ以降，日本空手協会で試合が続けられるとともに，他の団体・流派にも試合化の流れは大きく波及していく．同年11月30日には全日本学生空手道連盟主催の第１回全日本大学空手道選手権大会（両国国際スタジアム）が開催され，32校によるトーナメント方式の団体組手試合が実施された[67]．また，1964（昭和39）年10月には，日本空手協会（松濤館系）をはじめ，剛柔流，糸東流，和道流などの協力により，都道府県連盟および学生，自衛隊，実業団の３連盟を構成団体とする全日本空手道連盟（会長：笹川良一）が設立され，1969（昭和44）年10月に全日本空手道連盟主催の第１回全日本空手道選手権大会（於：日本武道館）が実施されている[68]．そして，1981（昭和56）年には国体の正式種目にも採用され，国内における空手の試合はより一般化された[69]．

また，国際団体としては1970（昭和45）年10月に世界空手連合（WUKO，現・世界空手道連盟 WKF）が設立されるとともに第１回世界空手道選手権大会が開催され，1975（昭和50）年には世界アマチュア空手連盟（IAKF，現世界伝統空手連盟 ITKF）が設立，やはり世界空手道選手権大会が開催された[70]．これらの大会においても当初，中山がそれぞれ審判長を務めており，国際化，競技化の推進に大きく貢献している．

3. 中山正敏の空手道思想

3.1　試合について

中山の大学時代，それまで形や基本練習，そして基本組手（約束組手）が主体であった稽古に，五本組手が考案されて連続の攻防動作が加わり，さらにその最後の１本が自由な攻防へと変化していった．そして，これまでの基本組手から自由一本へ，さらには五本組手の最後が切り離されて自由組手も作られ，これらは稽古形式として既成化されていった．中山はこれらを推進し，また指導者になると更にそれを一歩進め，組手試合を競う大会を開催し，試合を一般化する．これと同時に形についても試合化している．このように中山は試合化の立役者であるとともに，後年は審判長などを務めながらその行く末を見守る立場であった．

そうした中山であるが，初めての大会をおこなった1957（昭和32）年の10年後，1967（昭和42）年には，社団法人日本空手協会機関紙「空手道」の第１号において次のように自由組手偏重の稽古や試合化の弊害について言及している[71)]．

「己に克て」 中山正敏

体育，護身として育成され，発展してきた空手道はここ十年の間に，従来未開拓であった，新分野に鍬をいれつつある．試合の出来る，スポーツ空手としての開発が過渡的な段階ではあるが，盛んになりその完成への努力が，熱意が大きく実を結びつつあることは誠に喜ばしい限りである．

然しこのスポーツ空手も興味があると言うことそれだけでは何か一本芯の抜けた感がある．極言すれば，空手道の本質をも失うことにもなりかねない．残念ながら日頃の稽古にも昇段審査にもまた試合にもその弊害らしきものが時に見受けられるようになってきた．試合であるからには，勝たなくてはならない．それには審判員の判定を有利に導かなければならないので，審判員のとり易いようなポイントをかせごうと言う傾向になるのは当然であろう，これは勿論自信を以って判定し，一本とりきれない審判員の訓練の不足もあるがそれと共に選手にも審判が，「一本」と断定するに十分な突き，蹴り等の技に鋭い切れ味の良い強い威力がないためである．

基本技も十分にこなせないのにまた中間の練習もなしにやたらに自由組手に早くはしり易い．必然の結果であり，また基本自体も試合のための要領本位の練習になり易いためでもある．選手に早くなりたい，選手を早く育てたいと言う，選手，コーチ双方に責任があるとも言

えよう.「急がば廻れ」の諺のように一歩一歩，一段一段着実に正しい基本の修得に汗を流すことが肝要である.

近頃試合に勝つと言うことだけにとらわれ過ぎ真剣な鍛錬からのみ得られる気魄，威力共に欠け，いたずらに猛々しさを誇り，空手道人として最も大切な礼節さえも失われつつあるように見受けられるのは大変なげかわしいことである.

もとより試合ばかりが空手道ではないと同時に体育の面ばかりが護身の面ばかりが空手道ではない．その何れもが大きな空手道を形成する要素であるに過ぎない．空手道究極の目的は人に勝つことではなく，己に克つことである．己に克てないでどうして人に勝つことが出来得よう.　（社団法人日本空手協会機関紙　空手道　第１号，1967（昭和42）年）

また，1965（昭和40）年に刊行された著書『空手道新教程』においても「試合に勝ちさえすればよいのだという安易な考えから，ポイント主義に堕し，空手道特有の鋭い冴えと威力ある決め（極メ）が大変少なくなりつつある」と現状を憂いている[72]．自由組手や試合に勝つことだけにとらわれ，基本や形に裏打ちされた空手特有の鋭く，切れ味の良い，強い威力のある突きや蹴りなどが欠如する傾向にあることや，ポイント獲得が容易な技への偏重，必ずしも技が極まっていないことへの中山の警鐘はその後も続くことになる．自らが世に放った空手の試合によって，空手道が武道の本質を失いつつあることへの焦りが窺える．その焦りを表すかのように1979（昭和54）年には「私は船越先生の空手を引き継ぐ責任もあるし，一番最初にカラテの試合を船越先生の意向も聞かずに決断しただけに，大いに責任があるわけです．このままでは，あの世へ行った場合に船越先生からお前何をやってたんだと怒られる可能性が強いですよ」といったような発言も見られるようになる[73]．そして1985（昭和60）年，中山の最晩年の著書における「試合が盛んになるにつれ，空手愛好者が勝負だけにとらわれるあまり，ポイントさえとれば良いという安易な気持ちから，わざに空手本来のキビキビした節度ある動きと極めがなくなり，かたちだけの見せかけの格闘技になってしまったり，また暴力的な撲り合い同然の格闘に堕落するのではないかということである．それだけではない，もっと重大なことは果たしてこの組手や型の試合が空手道の創設者，船越義珍師が抱いていた空手道の心にかなっていたかどうかという点になると，なんともいえなくなるのである．なぜなら，船越師範の説かれた空手道の心は，きわめて高い倫理を要求しているからである」という記述につながっていく[74]．

学生時代，自由組手に専心し，試合化を推進してきた中山であったが，それはあくまで空手道の１つの側面としてであり，自由組手や試合に偏重せず，基本技の真剣な鍛錬から得られる

気魄や威力，武道的な本質（極め）を失わないことが重要であると考えていたことがわかる．時流の流れの中で空手道の競技化を推進し，「試合化に踏み切ったのは結局成功であったと確信」した中山であったが（2.4），晩年，空手道の本質を危うくする試合の正否についてその確信が揺らいでいたように見受けられる．

3.2　科学的な教授方法と教程の明示

前述（2.3.2）の通り，中山は西洋人に対する指導を長く担当してきた．その指導の中で，それまで日本でおこなわれて来たような経験主義的な指導では，西欧式の「なぜそうなるのか？」という理論的な質問に答えることが出来ないということを痛切に感じた．そのような経験を通して中山は，近代武道として空手道が発展していくためには，従来の経験主義的・主観的に空手道を捉えるのではなく，科学的に分析し，理論的に整理する必要があるという考えを持つようになった．そして，指導法の一大転換が図られていく．

また一方で，そのような思想や取り組みが生まれた背景には，中山が大学教員になったことや，その同僚に体力科学を専門とする加藤芳雄拓殖大学教授がいたことが影響している．このような取り組みは1960（昭和35）年頃には一応の成果が示される．科学的な分析については1959（昭和34）年12月発刊の「空手道創刊号」（日本空手協会は「空手道」と題する機関紙をたびたび創刊・廃刊している）に加藤が「空手道の科学　空手の筋電図学的研究」を発表し[75]，また1960（昭和35）年には加藤・中山の連名で「拓殖大学論集第25号」に「空手の動作分析」を発表している[76]．これらの研究によって得られた効率的な体の動かし方や筋肉の動作パターンを踏まえて中山は1960（昭和35）年１月発刊の「空手道第２号」に「空手道の科学　基本の原理」と題して，空手の動作原理をまとめている[77]．その中で動作の原理を「体の安定と重心の移動」「力とスピード」「力の集中」「力の合力」「偶力の利用」「反作用の利用」「リズム」の７つの要素として整理した．中山は後にこれを「フォーム－身体の安定と重心の移動－」「力とスピード」「力の集中」「技の原動力は筋力である」「リズム」「タイミング」「丹田と腰」という要素に再編し，1965（昭和40）年に発刊された『空手道新教程』（鶴書房）において「空手道修練の基本について」と題した章を設けて記載している[78]．この『空手道新教程』以降の著書では同じ文面が使用されていることから，この時期に中山の空手に関する理論化が完成したものと考えられる．また，『空手道新教程』では実技の解説に写真が多用され，正しいかたち，ポイント，練習方法などが網羅され，これ以降の書籍は基本的に『空手道新教程』を焼き直したものとなる．つまり，理論だけでなく，実技体系の整理に関してもこの時点で一応の完成を見たといってもよい．

このような中山の解説から読み取れることは，近代的な空手道は合理的に習得すべきという思想だけでなく，正しいものを伝えたいという執念ともいえるような強い信念である．試合・自由組手に偏重することによって，かたちが崩れると極めもなくなり，それはすなわち正しい空手道ではなくなってしまう．こうした書籍による子細な解説は，正しいかたち，正しい学習方法を明示することで，正しい空手道を伝え，そのような弊害を乗り越えたいという強い思いのためであったと考えられる．また，日本空手協会の研修員制度は中山の強い希望によって推進された．これについても正しい空手道を指導できる人を育て，正しい空手道を普及するために必要だったと考えられる．つまり一連のことから見えてくる中山の思想は，単に合理的な学習を目指すといったものだけでなく，正しい空手道を正しく伝えたいという考えである．事実，「私の抱負は，世界のどこへ行っても，我々の考えておる空手の真髄というかこれが空手の本質であるというものを失わないで，世界の空手が伸びていくことですね」と語っている[79]．

3.3 中山の考えた真の空手とは

中山の空手を代表する言葉は「極め」である．「極め」とは，「必要な時に必要な場所に自分の持っている最大限の力を集約したものを爆発させる」ことを表す[80]．中山の推進した試合では，攻防の技を繰り出しても相手には当てないルールである．これを寸止めという場合があるが，中山の目指しているものはそうではないという．「この頃よく若い人が寸止めと言うことを言うんですが，寸止めは松濤館ではない．何故なら，寸止めというのは拳が動いているのが直前で止まる．ところが空手の場合，特に松濤館の場合は目標の前で止めるのではなく，目標を体の急所の寸前に設定してそこへ最大限の力を爆発させるんです．寸止めと技を極めるというのは全然違うわけです．ですから協会の試合でも，入ったようだから一本というのでは空手の神髄にならない」と中山は説明する[81]．つまり，試合においても，直前で止める威力のない動作をするのではなく，技自体はあくまでも最大限の力を発揮し効力を持ちながらも，その作用点を手前にすることで結果として当たらないということが要求される．攻撃であろうが，受けであろうが，一撃必殺しうる可能性を含んだ武術，武道空手であるということが重要であると中山は考えた．

いつ如何なる時も「極め」すなわち働きのある技を出せるようになるためには，形，組手，鍛錬を黙々と重ね，有形無形の試練を乗り越え，如何なる変にも安心して応じられるだけの自信を養う必要がある．そのような努力をしながらも，一生に一度も，鍛えに鍛えた拳，脚を実際に使わないことが真の空手人であるという考えが中山の理想であり，空手道思想である．

4. 結　　語

中山は拓殖大学で空手道に出会い，予科・学部時代を通して船越義珍の指導を受けた．大学時代に習得した空手道を基盤に中国での９年間を過ごすと，帰国後は日本空手協会を創設，拓殖大学で教鞭をとりながら，協会の指導部長・首席師範を歴任して技術面を牽引した．その空手指導の過程において，中山は競技化の道を推進する選択に至ったが，それによって自分自身が真の空手に必要だと考える「極め」が失われようとしている現状を知ることとなった．中山自身，試合化自体に反対しているわけではない．中山が目指したような試合，すなわちポイントを奪取するために本質を失った動作の攻防ではなく，極めを持った技が繰り出される中で自らを磨くことが出来る試合ならば意味がある．しかし，実際にはそれが難しいということを1957（昭和32）年以来30年に亘り試合競技の運営に最も近くで携わってきた中山自身は自覚していた．そうした中から船越先生に顔向けできるだろうかという思いが生まれてきたと考えられる．それでも中山は最後まで船越の弟子として空手道に向き合い，教程を明確にし，指導員を育てることで，正しい空手道を正しく伝えるために最期まで苦心し続けた．

本論では中山の生涯と空手道思想を明らかにしてきた．現在では試合が当たり前におこなわれる空手であるが，その行く末を考えるには，導入者中山の軌跡と苦悩を知り，その中から本当に進むべき道を模索する必要があるのではないだろうか．本論がその一助となれば幸いである．

注

(1) 中山が入学した拓殖大学は時流の影響を大きく受けた大学である．拓殖大学の前身は台湾協会学校であり，「台湾及び南清地方において公私の業務に従事し彼我の交情を潤和便安ならしめて台湾の将来に貢献する人材を育成すること」を目的に1900（明治33）年に設立された．その後，台湾協会専門学校，対象とする地域を拡大した東洋協会専門学校，東洋協会植民専門学校の名称を経て，1918（大正７）年に初めて拓殖大学の名称を用いる．ただし，この拓殖大学（第１次）の名称は大学の文字を使用しているが，法規上は専門学校令に従い設置された大学である（予科１年，本科３年）．1922（大正11）年，大学令の下，予科２年，大学部３年の５年制，学部は商学部のみの単科大学として東洋協会大学が文部省に認可される．そして，1926（大正15・昭和元）年に再び拓殖大学（第２次）と名称変更した．これが中山の入学した拓殖大学である．その歴史は，明治時代から急速に高まった日本の海外進出の機運と符合するかのように名称を変更しながら発展し，その方面に多くの人材を送り出してきた．まさに海外雄飛の登竜門であり，中山の志を果たす学び舎といえる．一方，第２次世界大戦後は，戦前に海外で活躍する人材の育成することを任務と伝統としてきたために，軍部の政策に加担してきたと見做され廃校の危機を迎える．そのため，1946（昭和21）年，紅陵大学と名称を変更した．紅陵大学としての新制大学認可を経て，1952（昭和27）年，第３次ともいえる名称変更で拓殖大学に名称復帰し，現在の姿と

なった．まさに時代の要請に応じて設立され，時流の中で発展･変化してきた歴史を持つ大学といえる．

(2) 予科とは，大学の学部入学のための前段階となる旧制高等学校（旧制中等学校の４年修了またはそれと同等以上の学力があると認められた男子に高等普通教育を施した学校）に準じた課程である．当時，旧制中等学校は５年制であったが，５年卒業者と旧制高等学校などへの進学を予定した４年修了者が存在していたため，拓殖大学の予科には旧制中等学校５年卒業者を対象とした２年制大学予科（第１部）と，旧制中等学校４年修了者を対象とした３年制大学予科（第２部）が存在していた．これらの予科の後，３年制の学部に進学する仕組みになっている．この制度下では，同じ年に予科入学しても，学部進級や学部卒業では第１部が先になるケースや，旧制中等学校５年生卒業後に入学すると４年修了者が予科の先輩となるケース（ただし，この場合は学部では同期となる）など，複雑な先輩後輩関係が存在したようである．拓殖大学には，その他に旧制の専門学校令に基づいた専門部が存在する．拓殖大学の専門部は，拓殖大学（第１次）が最後の卒業生を送り出した1925（大正14）年３月に東洋協会大学専門部と名称を改め，夜間に授業をおこなう修業年限３年制の専門部として誕生した．その後，1926（大正15）年の東洋協会大学の名称変更に伴い，拓殖大学専門部となっている．専門部は旧制中等学校の５年卒業者あるいは４年修了者が入学することが出来る．従って予科・学部・専門部の入学・進級が相まってさらに学年と年齢の関係は複雑であり，同じ入学から唐手術同好会に参加すると年下でも稽古では先輩である場合や旧制中学校の同期が先輩になる場合，学部の同期となっても稽古では先輩になるなど様々なケースが存在した．

(3) 以降，大学時代に関する記述（2.2.3および2.2.4）については，特に引用を示した場合を除いて，中山の記述をもとにまとめた．

(4) 華北政務委員会とは，1940（昭和15）年３月から1945（昭和20）年の日本敗戦に至るまで，華北の日本占領地に存在した機関．日本が後援する汪兆銘が蒋介石に対抗して政権を発足させると，それに参加した中華民国臨時政府は改組し，華北政務委員会となった．そして，それまで中華民国臨時政府が統治してきた北京周辺（河北省，山東省，山西省，北京市，天津市，青島市など）の行政実務を担当した．

文　　献

1）宮本知次・中谷康司・青木清隆・小林勝法・数馬広二・外間哲弘（2005） 空手道の近代化をめぐる船越義珍に関する研究課題． 中央大学保健体育研究所紀要 23：95-127.

2）中谷康司・宮本知次・青木清隆・小林勝法・数馬広二・外間哲弘（2007） 空手道の発展における地域的２軸性：沖縄と本土． 中央大学保健体育研究所紀要 25：27-65.

3）中谷康司・宮本知次・青木清隆・小林勝法・数馬広二（2008） 空手道近代化の特徴 ―柔道との比較における考察―． 中央大学保健体育研究所紀要 26：25-44.

4）青木清隆・中谷康司・宮本知次（2012） 船越（富名腰）義珍の空手道思想に関する研究 中央大学保健体育研究所紀要 30：35-55.

5）中谷康司・宮本知次・青木清隆・小林勝法・数馬広二（2008） 前掲書３）.

6）井上 俊（2004） 武道の誕生，吉川弘文館．東京．pp.2-10.

7）青木清隆・中谷康司・宮本知次（2012） 前掲書４）.

8）池田整治（2011） 私と空手道 第６回 JKFan 98：100-101.

9）杉崎寛（1982） 船越義珍の衣鉢を継ぎ空手の正統を伝える中山正敏 現代武道家物語．あの人この人社．東京．pp.345-368.

10）池田整治（2011） 前掲書８）.

11）杉崎寛（1982） 前掲書９）.

12）池田整治（2011）　前掲書８）.
13）拓殖大学創立百年史編纂専門委員会（2002）　拓殖大学百年史　部局史編．pp.1-813.
14）池田整治（2011）　前掲書８）.
15）朝日新聞（1987）　４月16日　東京朝刊：27.
16）拓殖大学創立百年史編纂専門委員会（2002）　前掲書13）.
17）中山正敏（1979）　空手部始動す　拓殖大学麗沢会空手部50年史：３-13.
18）拓殖大学創立百周年史編纂室（2002）第９章　マーシャル・アーツでもある武道の継承と世界化　世界に天駆けた夢と群像／拓殖大学百年・小史　改訂版．pp.226-241.
19）拓殖大学創立百年史編纂専門委員会（2011）　空手部（第３章 昭和前期の学生生活 第１節 麗澤会・拓殖研究会・報国会）　拓殖大学百年史　昭和前編．pp.261-265.
20）高木正朝（1979）　拓大唐手術こと始めの記　拓殖大学麗沢会空手部50年史：２-３.
21）中山正敏（1979）　前掲書17）.
22）三田空手会（1999）慶應義塾体育会空手部75年史 . 慶應義塾体育会空手部．p.116.
23）拓殖大学麗沢会空手部 OB 会（1979）進展表　拓殖大学麗沢会空手部50年史：175-208.
24）月刊空手道編集部（1980）　空手人往来　日本は絶対勝たなきゃ　中山正敏　月刊空手道３月号（Vol.25）：28-29.
25）杉崎寛（1982）　前掲書９）.
26）高木正朝（1988）　第２章　空手道の歩み・その一　嗚呼風雪空手道　牧羊社．東京．pp.57-96.
27）月刊空手道編集部（1980）　前掲書24）.
28）拓殖大学研究所（1984）　中山正敏教授の略歴および著作表　拓殖大学論集　149（中山正敏教授　退職記念論集）：冒頭.
29）杉崎寛（1982）　前掲書９）.
30）関智英（2009）　華北政務委員会公報　東洋文庫現代中国研究資料室　資料ニュース　解題編　09-02（http://www.tbcas.jp/ja/09huabei.pdf）.
31）拓殖大学研究所（1984）　前掲書28）.
32）月刊空手道編集部（1980）　前掲書24）.
33）拓殖大学麗沢会空手部 OB 会（1979）前掲書23）.
34）池田整治（2011）　前掲書８）.
35）月刊空手道編集部（1980）　前掲書24）.
36）杉崎寛（1982）　前掲書９）.
37）中山正敏（1965）　私の歩いた空手の道　空手道新教程．鶴書房．東京．pp.20-21.
38）月刊空手道編集部（1980）　前掲書24）.
39）中山正敏（1965）　前掲書37）.
40）月刊空手道編集部（1980）　前掲書24）.
41）拓殖大学麗沢会空手部 OB 会（1979）　前掲書23）.
42）中山正敏（1955）　空手について　空手（牧野吉晴著所収の解説）．山ノ手書房．東京．pp.260-264.
43）高木正朝（1978）　日本空手協会のたどった道〔３〕　隔月刊　空手道　Vol.3：22-23.
44）三田空手会（1999）前掲書22）．pp.37-40.
45）三田空手会（1999）前掲書22）．pp.40-43.
46）中山正敏（1979）　前掲書17）.
47）中山正敏（1985）　第１章 交換稽古から試合化へ（第２部　近代空手道の試合化への長い途）　空手道　精神と技法．カヅサ．長野．pp.42-45.

48）杉崎寛（1982） 前掲書９）.
49）高木正朝（1978） 日本空手協会のたどった道〔４〕 隔月刊 空手道 Vol.4：22-23.
50）拓殖大学麗沢会空手部 OB 会（1979）前掲書23).
51）拓殖大学研究所（1984） 前掲書28).
52）拓殖大学麗沢会空手部 OB 会（1979）前掲書23).
53）拓殖大学研究所（1984） 前掲書28).
54）中山正敏（1979） 前掲書17).
55）大島劼（1985） 空手が海を渡った頃（第２話） 近代空手11月号：34-39.
56）中山正敏（1955） 前掲書42).
57）日本空手協会（1957） 日本空手協会月報 一月号：２.
58）高木正朝（1977） 日本空手協会のたどった道〔１〕 隔月刊 空手道 創刊号 Vol.1：16-17.
59）高木正朝（1978） 日本空手協会のたどった道〔２〕 隔月刊 空手道 Vol.2：14-17.
60）高木正朝（1978） 前掲書43).
61）高木正朝（1978） 前掲書43).
62）空道館追悼記編集委員会（1984） 一隅を照らす 万象清水敏之の生涯 空道館. pp.293-295.
63）日本空手協会（1957） 日本空手協会月報 五月号：２-８.
64）高木正朝（1978） 前掲書49).
65）日本空手協会（Web） 沿革（http://www.jka.or.jp/j-what/history.html）.
66）高木正朝（1978） 前掲書49).
67）三田空手会（1999）前掲書22). pp.47-51.
68）全日本空手道連盟（Web） 沿革（http://www.jkf.ne.jp/about/history).
69）外間哲弘（2001） 空手道歴史年表, 沖縄図書センター. 沖縄. pp.74-75 .
70）日本空手協会（1976） 新時代への幕開け 月刊 空手道 第３巻第６号（１・２新年号）：２-７.
71）中山正敏（1967） 己に克て 空手道（社団法人日本空手協会機関紙）第１号：５.
72）中山正敏（1965） 前掲書37).
73）月刊空手道編集部（1979） 特集 特別対談 日々これ武道 中山正敏 × 豊田穣 月刊空手道 ２月号 Vol.11：４-10.
74）中山正敏（1985） 前掲書47).
75）加藤芳雄（1959） 空手道の科学 空手の筋電図学的研究 空手道 創刊号：２
76）加藤芳雄・中山正敏（1960） 空手の動作分析 拓殖大学論集 第25号：１-14.
77）中山正敏（1960） 空手道の科学 基本の原理 空手道 第２号：２.
78）中山正敏（1965） 空手道新教程. 鶴書房. 東京. pp.1-318.
79）杉崎寛（1982） 前掲書９）.
80）月刊空手道編集部（1979） 前掲書73).
81）月刊空手道編集部（1979） 前掲書73).

付表　中山正敏と日本空手協会および関連事項に関する年表

西暦	年号	年齢	イベント
1913	大正 2 年	0 歳	4 月 6 日，山口県に生まれる
1930	昭和 5 年	17 歳	拓殖大学空手部創立
1932	昭和 7 年	19 歳	拓殖大学に入学，空手部に入部
1937	昭和 12 年	24 歳	拓殖大学商学部（拓殖科，支那語専攻）卒業
1937	昭和 12 年	24 歳	満州国派遣，北京留学生として北京同学会語学校，中国大学に留学
1942	昭和 17 年	29 歳	華北政務委員会・専員
1943	昭和 18 年	30 歳	一時帰国，結婚（妻：秋子）
1946	昭和 21 年	33 歳	終戦にともなう引揚帰国
1948	昭和 23 年	35 歳	日本空手協会を任意団体として設立・技術顧問
1954	昭和 29 年	41 歳	拓殖大学体育講師，空手部部長，試合化を推進
1955	昭和 30 年	42 歳	日本空手協会総本部道場設立（東京都新宿四谷）
1956	昭和 31 年	43 歳	拓殖大学体育局次長（～昭和 40年 3 月）
1956	昭和 31 年	43 歳	総本部研修生制度発足（第一期生入会）
1957	昭和 32 年	44 歳	船越義珍逝去（88 歳）
1957	昭和 32 年	44 歳	日本最初の全国空手道選手権大会開催（東京体育館），以後毎年全国大会を挙行
1957	昭和 32 年	44 歳	『空手道基本教程』（日本空手協会）を出版
1958	昭和 33 年	45 歳	日本空手協会の首席師範に就任
1958	昭和 33 年	45 歳	日本空手協会，文部大臣より社団法人認可（許可委社 180 号）
1960	昭和 35 年	47 歳	防衛大学校体育講師（非常勤）（～昭和 39 年）
1960	昭和 35 年	47 歳	拓殖大学調査課（現在の入学課）長兼任（～昭和 38 年 10 月）
1961	昭和 36 年	48 歳	『空手道教室』（ベースボールマガジン社）を出版
1962	昭和 37 年	49 歳	『空手の基本』（日本空手協会）を出版
1964	昭和 39 年	51 歳	全日本空手道連盟（JKF）設立
1965	昭和 40 年	52 歳	『空手道新教程』（鶴書房）を出版
1969	昭和 44 年	56 歳	拓殖大学体育局長（～昭和 50年 6 月）
1969	昭和 44 年	56 歳	第 1 回全日本空手道選手権大会（JKF）の開催　於：日本武道館
1970	昭和 45 年	57 歳	JKF，世界空手連盟（WUKO，後に WKF）に加盟
1972	昭和 47 年	59 歳	拓殖大学政経学部教授
1975	昭和 50 年	62 歳	IAKF 世界大会開催（米国），以後 2 年毎に第 4 回まで開催
1977	昭和 52 年	64 歳	『ベスト空手　第 1 巻』（講談社インターナショナル）を出版 以降，第 8 巻（～ 1981（昭和 56）年）まで
1981	昭和 56 年	68 歳	滋賀国体より空手道競技国体正式種目
1984	昭和 59 年	71 歳	拓殖大学定年退職
1985	昭和 60 年	72 歳	『空手道　精神と技法』（カヅサ）を出版
1987	昭和 62 年	74 歳	4 月15 日午後 0 時 9 分，心不全のため東京新宿区の東京女子医科大学病院にて死去，74 歳

※年齢は，イベントと誕生日の前後関係を考慮せず，その年の到達年齢を示した．